会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和2年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」（２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第5回学習評価WG |
| 開催日時 | 令和2年12月14日（月）　15時00分～17時00分 |
| 場所 | 福岡：リファレンス駅東ビル貸会議室 |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾 委　　　員：植上　一希、岡村　慎一、近藤　賢宏、丹田　桂太※オンライン参加：岩﨑　千鶴、小田　茜、田澤　初美、瀧本　知加、佐藤　昭宏　　　　　 　　　　　　　 計 10名オブザーバー：渡邉　晶帆、内川　穣太　　　　　　　　　　 計 2名請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　 計 1名　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 合計 13名 |
| 議題等 | 1. アクションリサーチ中間まとめ報告（瀧本）

・教務担当者3回、学級担任2回、計5回実施した。(1)言語化に関して・育成を目指す非認知能力（と思われる能力観）がある程度の明確さをもって言語化されており、①概念化されているもの ②行為ベース ③状態ベース ④具体的行為　とバリエーションがいくつかある。・②行為ベースは教師同士の教育観のすり合わせや学生評価のすり合わせに使われ、③状態ベースは、学生に授業の目標を提示したり、教員が自分の授業の目標を明確化するために便利だと感じたので、今後は②③に注意してリサーチしていきたい。・現場経験の有無で言語化のきっかけやヒントが変わり、卒業生とのやり取りなども非認知能力のイメージ作りに繋がっている。(2)育成戦略に関して・育成を目指す実践として学校教員全体に9つの場があった。・非認知能力の育成に関して明確に回答があったのは授業運営で、担当者、目標、授業方法、評価、など多元的に意識されている。・その他のインターンシップ、集団活動などの特別活動では、回答が曖昧になってくる。・特別活動は授業運営での教育を実践する場となるため、特別活動での育　成内容を明確にすることがキーになるのではないかと考えている。(3)今後のアクションリサーチの課題・上記、行為ベース、状態ベースの目標と教育実践の関係を見ていく。・各学校で補充的な調査を実施。・対面で行う予定だが、新型コロナの影響もあるのでオンラインも検討。(4)報告についての議論・言語化のバリエーションについてもう少し明確に説明を。（植上）→①～④まで抽象的→具体的に並べている。（瀧本）　→③は目指す姿、②がそれを具体的にしたものと感じる。学科によって求められる非認知能力と学科関係なく求められる非認知能力に区分できると良い。（高岡）　→教育現場での能力の種類と出どころの整理、非認知能力の教育の目標や教育方法や場所を理解し言語化することが第一段階の目標。職種性が強いのか汎用性が強いのかなど言語の出どころを整理することで、非認知能力の区別をしていき、それぞれをどのように教育し評価するのかを探っていきたい。（植上）→学習目標・成果が「どのようなプロセスによって」「なぜ拾い上げられたのか」、今は資質と能力の部分が混在しているので、そこを整理した上で育成の研究をすると、非認知能力を技能やマインドと結びつけるとしたらどのような評価ができるのかを考えると基準が決まってくるのでは。（岡村）→リサーチをしていて、目標の姿になるために必要な汎用的な部分と職種的な部分をどのように分けていけばいいのか難しいと感じた。（小田）→言語化された非認知能力に対する理解が教員によって違ってくるのではないかと感じる。（近藤）→リサーチデータを他の委員にも確認してもらい枠組みや概念のすり合わせをし、「職業実践専門課程の学習目標の実現」を考慮し、今後のリサーチについて検討したい。（瀧本）1. アンケート調査報告（佐藤・丹田）

・現場では評価の何を重視し、どのように評価にとりくまれているのか？実態把握をし、研修への落としどころ、研修で取り扱うべきポイントの探索に繋がっていくと考えている。・本日は一般教員を中心に速報値を共有する。・教務責任者や重要変数のクロス分析などに基づく傾向の共有はSlackなどで共有する予定。(1)一般教員の調査結果の報告・195件の回答をいただいた。・調査の分析に十分な、様々な教員の方のデータとなった。・学校で学んだ内容の評価についての卒業生への追跡の実施状況に関しては一般教員と教務責任者でGAPが確認された。・特に重視して育成している力に関しては、授業・実習に関するものは予想通り高いが、学生指導・ホームルーム・イベントなどを回答している方も一定数いるので（教務責任者とのギャップが出ている）、深堀していきたい。・重要だと思われる指導や機会に関しては、1つ目は回答が分野関わらず　まとまっているが、2つ目になると回答の種類が増え、全体的には、面談やホームルーム、ボランティアに関して重要視している人が多い。また分野別にも重要視している項目が変わってくるので、もう少し内容を見ていきたい。(2)一般教務員調査の報告についての議論・回答の中ではインターンシップをやっていない学校もあると思うので、全体的に見ると、分母が違い解釈に違いが出てくるのでは。（高岡）　→分野別にも詳細に見ていく。（佐藤）・カテゴリーを分けた結果として、非認知能力の意識付けの違いはあるか？（岡村）→もう少しデータを詳細に分析しながら見ていきたい。（佐藤）　→教務責任者は教務をしたことが無い人もいるので、考え方が変わってくると考える。（高岡）・企業が求める人材がコロナ禍において変わってきているので、今後開発する研修内容において「アフターコロナ」を含んだものを加える必要がある。（飯塚）(3)教務責任者の調査結果の報告・114件の回答をいただいた。・教育に関する会議については実施しているところが多いが、評価に関する会議は6割強の学校が実施していない。・全体的に非常勤講師が参加する会議が少ない。(2)教務責任者の報告についての議論・担任教員の非認知能力に対する理解がより必要だと感じた。（田澤）・現場スタッフ、責任者の温度差を一緒にしていくことが必要だと再確認した。（岩﨑）・（元々実施されていない学校があるとは思うが）インターンシップを重要視する数が少なかったのが意外だった。（近藤）1. スケジュール確認

・第6回学習評価WG会議…1月25日（月）14時～16時オンライン開催予定　※状況により変更　　　※研究チームで事前に打ち合わせをし、会議で報告。 |
| 配布資料 | ・1224学習評価WGAR報告・学習評価ＷＧ資料1214アンケートチーム再 |

以上